慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | J・R・マカラツク編 経済学文献 |
| Sub Title | |
| Author | 三邊, 清一郎 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1939 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.1 (1939. 1) ,p.141(141)- 146(146) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19390101-0141 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19390101-0141 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# J・R・マカラック編「經濟學文獻」

三邊清一郎

最近倫敦經濟政治學校から經濟學稀覯書複刻叢書の一冊として、J・R・マカラックの「經濟學文獻」The literature of political economy: a classified catalogue of select publications in the different departments of that science, with historical, critical, and biographical notices. Lond., 1845. の複刻が出版された。マカラックは言ふまでもなく正統派經濟學者の一人、アダム・スミスの流を汲む、リカアドオのより嚴密な祖述者である。活動の部面は無論經濟學の分野であるが、經濟學文獻の蒐集者としても亦有名であつた。本書は經濟學者としての彼、文獻蒐集家としての彼の共同所產である。後者の彼に就いては嘗て書いたことがある（「學燈」第四十二年第八號「書誌學者としてのマカロック」）。前揭書を紹介するに當り、こゝでは主として經濟學者マカラックに觸れたい。

彼は一七八九年（五月一日）ウキグタウンシヤ（ホキソオン）に、その地方で statesman と呼ばれた自作農の子として生れた。幼にして父エドワアドを喪ひ、母方の祖父（グラサアトンの教區牧師で James Laing といつた。）から「知識の殘滓」を享けたとある。

少年時代は仕合せな方でなかつたらしい。母が再婚したので、これに伴はれてキンロスに移つた。こゝで數年間學校に通ひ、後（一八〇五年）エデキンバラに學んだ。しかし學位はとるに至らないで辯護士事務所に勤めた。しかし直ぐ嫌やになつて、これから經濟學の研究を始めたと彼の傳記にある。（註）

註　彼の傳記に就いては主として次の三資料に據つた。

The late Mr. M'Culloch. (From the Times.)

John Ramsay McCulloch(1789-1864). By James Bonar. In 'Contributions towards a dictionary of English book-collectors.' Part 6. 1895.

McCulloch, John Ramsay (1789-1864), by J. M. Rigg. In 'Dictionary of national biography.' Vol. xii. 1909.

處女作は一八一六年の An essay on a reduction of the interest of national debt, etc. である。後にリカアドオ價値論辯護のため筆を執つた「スコツトマン」には創刊（一八一七年）以來關係があつた。エデキンバラ評論には一八年から寄稿して居る。彼はエデキンバラから倫敦に移つた。その時期はタイムスのオビチユアリの記事には一八二〇年とあるけれども、J・ミルが彼にリカアドオの死を知らせた手紙（一八二三年九月十九日附）をエデキンバラへ宛てゝ書いて居ることや（A. Bain: James Mill. A biography. 1882. p. 209-11.）、彼の Discourse の序文（一八二四年十月附）、Principles の序文（一八二五年九月附）がそこで書かれて居ることなどを考へ合せるとその正しさに疑問がある。彼は前住地でもこの地でも經濟學のクラスをもつたとある（Discourse. 序文）。J・S・ミルの自傳にもこの頃（一八二五年）個人教授を行つたことが記されて居る（Autobiography. 今泉浦太郎、石田憲次共譯・大正十三年版、一七八頁）。この時代の彼は友人によつて「餘暇に富む人」といふ言葉で言ひ表はされて居た（Bain: James Mill p. 209.）。言はゞ在野の學者として經濟學の普及に努めて居たらしい。彼はこれ等の講義によつて「この陰鬱科學（ディズマル・サイエンス）を時好に投ぜしむるに成功した」と稱せられる（National biography. Vol. xii. p 463 b.）。

英國は經濟學の鄕土であるに拘らず、かの國で曾て助成の手が伸べられなかつたことは、彼の遺憾とするところであつた（Discourse. p. 86）。その主要原理、結論を大衆の中へ普及することは、重要且つ必要であると考へた。經濟學の研究が大衆に不用であるといふのは間違ひである。輿論の力――強く愼重に主張せられる時は、最も傲岸な宰相と雖も屈しなければならない輿論の力といふものは、大衆の中から生れるのである。大衆が愚昧ならば、その意見は偏見に囚はれ易い。彼等が受身の傍觀者である間は害は猶ほ尠い。けれども彼等は自分に判斷力の缺けて居ることを自覺しないから、必らず公事の論議に參加して來る。しかもその誤つた情熱と數と精力とによつて、屢々勝利を獲得する。この弊を匡救する途は唯々一つしかない。それは「この學問の基礎的な根本原理を一般に知らしめるに在る、と彼は言ふのである（Discourse. pp. 80-81.）。

この意味に於いて、彼は一八二四年に設けられた「リカアドオ記念經濟學講座」の講師に選ばれたことをいたく喜んだ。この講座は、前年九月この偉大なる經濟學者が逝いた時、彼の名を記念するために友人間に企てられたものである。十年間經濟學の一講座を維持する。講師には年百磅、場所代には二十磅。そのため千二百磅を醵金すると いふのがその目論見であつた（Bain: James Mill. p. 214.）。かくしてマカロツクが講師としてエデキンバラから迎へられたことは前述の通りである。倫敦に於けるこの講義は、多大の成功を收めた傳へられる（Ibid. p. 265.）。一八二四年の「經濟學の發生、進步、特殊目的並びに重要性」A discourse on the rise, progress, peculiar objects and importance of political economy, etc. Edinburgh, 1824. は、これ等公私講座の序講として講述せんとして果さなかつたところを、聽

講者の便宜のために印刷に附したものであるといふ。（序文）。それはその前年出版された大英百科辭典第四版補遺に於ける彼の「經濟學」の項と略々同一内容をもつものであるが、彼は更に翌年本論を含む完全な論著として主著「經濟原論」The principles of political economy: with a sketch of the rise and progress of the science. Edinburgh, 1825. を公にした。一八二八（又ハ七）年新設ユニバシテイ・カレッヂの初代經濟學教授に迎へられた。しかしこの講座には寄附財産がなく、聽講者も收入を補ふほどでなかつたので數年にして罷めた（一八三二年。National biography. Vol. xii. p. 463 b. The late Mr. M'Culloch, from the Times.）。また一文献によれば、この講座は前記リカアドオ記念講座の繼續でもあつたらしく、年々百磅の寄附があるだけで、地位が改善されることがなかつたから辭したのだ、といふ風にも書かれて居る（Contributions. Pt. 6. p. 1. 高橋誠一郎教授著「經濟學史」上卷、四三九頁以下參照）。

彼は多作の人であつた。エデキンバラ評論への寄稿だけでも七十六篇を數へるといふことである。主なものには、前掲書の外、On the circumstances which determine the rate of wages. 1851. Dictionary of commerce and commercial navigation. 1832. Dictionary, geography, statistical, and historical, of the various countries. 1841. On the principles and practical influence of taxation and the funding system. 1845. 等が擧げられるだらう。私はその中に本篇主題の「經濟學文献」をも入れたいのである。蓋し第一に、いかなる學問の分野にあつても、現在の階段は過去の知識の集積を基礎として成立して居るのであるから、既存文献についてある程度の知識をもつことは研究上必要であるからである。第二には、いかなる個人の勞作でも、畢竟その人の個性を離れることの出來ないものであり、それが強ければ強いほど性格が深く滲み出てゐて、その人の思想を研究する上によき便宜となり得るものであるからである。

第一に就いては、著者自らその序文に於いて說いて居る。いづれの學問領域に於いても、多數著作を蒐めその歷史に努力を拂ふ人は、必らずや古人の間に堅實な理論を發見して意外とすると共に、既に精算された筈の膠論が飽きず繰返されて居るのに驚くだらう。殊に政治學、經濟學に於いてこれが甚しい。蓋し第一に、この分野では「著者、その後援者等の利害と、公共のそれとの間に存する不一致」が理論を僞裝させ、詭辯的出版物の發生を促すからである。「邪惡は公の利益を害するけれども、殆んど常に一部個人の利益を產むことを誤らない。」第二の原因は、「黨派の勢力」である。諸政策は公の利害によらずして、筆者の屬する黨首の好惡によつて批判される。究局に於いて勝利は眞理に歸するとしても、惡を善と裝はせ、害を益と、益を害と觀じさせる企てが久しきに亘つて榮えた例は、內外の歷史に乏しくない。「信賴するに足る諸文献の知識をもつことは、公事に携はるものに極めて大切である。」しかし效用はこゝに止まらない。原理を展開し、新しい光りの下に於いてこれを見直し、またその應用を奬むるにしても、「既に始められたもの、完成されたもの、猶ほ發見を俟つもの、說明を遺すもの」を知らなければならない。これに關する消息を傳へるものも、亦文献の知識である。「次の書は、既に尋ね確立せられた原理の探求に努力し、公衆の面前に抑出されて既に年ある思想を、創見なりとして提示する有能の士あるを示すことによつて、この知識の缺乏に基く不都合の樣々の例を提供する」と（p. v-vii.）

第三には、本書は一個の書誌である。J・ボナアは「眞の經濟學書誌」の最初のものであると評價して居る（Contributions. Pt. 6. p. 1.）。それは本書以前の同樣の編述が、マツシイのそれのやうに、單なる書目に留まつたからであらう（本誌第三十二卷二月號高橋誠一郎教授「ジョシッフ・マッシイ編商業・通貨及び救貧法に關する書簡及び小冊覓集目錄」二二九頁以下參照）。本書は經濟學書誌として甚だ優れたものである。彼はその編纂に當り、主要圖書に對し解說と短評を試み、「一部主要理論の生成、並びに樣々の時期に於いて經濟的輿論を强

力に決定し、その種著述の出現を促した諸事情」を附記した(p. viii.)。自分でもこの點を誇つて「私の意圖が成功して居るとすれば、本書は主要經濟書の批判的目錄たると共に、ある程度經濟學史たるであらう」と言つて居る(p. viii.)。かゝる努力は、經濟學の分野に於いては、嘗て爲されたことのなかつたものである。しかし附記された批評解說が必ずしも公正であつたといふのでない。その解說が時に誤謬を含むことは、高橋誠一郎教授の嘗て指摘された通りである(同教授著「重商主義經濟學說研究」六八頁參照)。　また彼の批評に就いて言へば、彼は自ら「諸著の特質を表はすに公正であることを努めた」と言つて居るけれども、しかしそれは、彼が「この學問の原理に就いて執る見解」に從つてそうであつたに過ぎない(p. ix.)。彼はリカアドオの嚴密過ぎる後繼者であり、彼れの體系はリカアドオの體系であつた。彼の批評がこゝから出て居ることは言ふまでもない。例へば彼に據れば、リカアドオの原論は「極めて意味の深い創造的な好著」であり、その出現は經濟學史上に一新時代を劃するものであつた(p. 16.)。これに反しマルサスのそれは、「實際の適用を顧慮するといふ表題の文言にも拘らず、その見地からしても「經濟學原理の說明として觀察せられる資格なき」ものであつた(p. 18)。彼もまたそのことを知つて居た。彼はこれによつて、諸著を誤解するものと解せられるならば、遺憾なる旨を附言して居る(p. ix.)。しかし吾々は、彼の批評にこの偏倚あるが故に、却つて本書が單に一個の經濟學書誌たるに留まらず、また思想史上價値を有するの書たることを認める。蓋しこの偏倚を辿るによつて、吾々は彼の學說をより深く理解する便宜を得るからである。

本書の原本は本塾圖書館にも收藏するけれども(E. 37-29.)、數年前のミュズイアム・ブック・ストアの目錄によれば、一〇磅の稀少價値あるものとして記載されて居る。吾々はこの複刻によつて容易く本書を手にし得るやうになつたことを多としなければならない(Reprinted by the London School of Economics and Political Science (University of London) 1938. xx, 407 pp. 12 s. 6 d.)。

# 前號（第三十二卷第十二號）目次


◉景氣變動論前史　武村忠雄
◉獨逸ハンザ衰退期に於けるベルゲンの商業に就いて　高村象平
◉我國に於ける小賣商問題——配給組織論への理論的反省——　岩田仭
◉クルーノー「富の理論」の出版百年に際して　寺尾琢磨
◉古版經濟書解題　高橋誠一郎
ジョングレー著一千八百四十八年版『貨幣の本質及び效用に關する講義』
◉椎名幾三郎著『海上保險論』　園乾治
三田學會雜誌第三十二卷後半總目次



◉一冊定價金五拾錢　郵稅金壹錢五厘
◉半ケ年分金貳圓九拾錢
◉一ケ年分金五圓四拾錢　郵稅共
◉編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
◉營業に關する用件は發賣元宛
◉原稿締切期日は發行の前月十日限
昭和十三年十二月十八日印刷納本
昭和十四年一月一日發行
毎月一回一日發行
三田學會雜誌
第三十三卷　第一號
編輯兼發行者　東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾內　江田範保
印刷者　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子鐵五郎
印刷所　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　子活版所
發賣元　東京市芝區三田二丁目一番地　丸善株式會社三田出張所
電話三田(45)一一九二六番　振替口座東京一一九二七番　一八五二番
●尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す
發行所　東京芝三田慶應義塾內　理財學會
振替口座　慶應義塾　芝區三田二ノ二　東京一八二〇四番

禁轉載